日本一統志

四十

862
160

類
號
册
40

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

特3-1
帝國圖書館藏

日本一統志巻第八十

目録

一 丹州荻田和勝之事
附江口三郎右衛門武道食義無類之事
并丹州長宅浪人住神明丁之事
一 讃岐國中一揆之事
附一揆方上條城を守之事
并堀監物智略之事

福原達夫氏寄贈本

帝國圖書館藏

日本一統志巻第八十

丹羽前田和睦之事
附江口三郎右衛門武略并金森出頭之事
并丹羽長重浪人後神明丁ニ在之事

别て丹羽前田の両家は丹羽前能家老共有り浅
合人の智謀深く先を考へけれハ私の為と丹羽早
速の和睦済し元札前田利長様の外に恨有山是ハ
我か此道より小國ハゝ長重さへ扱ひけれハ是外ハ人の為
しゝ進て小國長首尾能の通札を取て宮本へ
此段を前ま内府公御名人旅へ帰りて下向出し利長の

母芳春院殿ハ御懇志の御命に代識にあらく御為に入れ
申しの御使度々の進物毎日々々の資福にまゐらせて
おもしろき事に月も御好のまゝと在下沸る許御承
られ加賀にてありし御人の係の事も申されしかハ母殿様
の外御悦有り五月三日に利長方へ関東への使者に
急との事先方にて善徳内府公御若君中にも
御頼母敷思召され候し利長の心中にも芳春院
殿への御無情不成と承り存念られハ内府御心実に色
以似せ物にあられ利家と御約束の通りは若き利長と
江戸中納言秀忠卿と御入魂も永遠に有りべし

と御申ハ御志それと存じく出御わかりし内府公も
実芳にも十分の御志実と思まで芳春院殿の志ならびに
て利長の小国衆の親類なる長臣との縁と芳石御
彼是にて相と利長尚家の味方難虚にも今実
なりしと四百入しましとや是奴方存に宮初は能
世実女芳春院殿の名内府公の御名出合し
虚なり実にも人の境虚実にて下公は実や何
の境にも人自然と実にも入る虚の実とても又足
ハ利長未知にて家老殿の有りとして人質を
差出し急度秘法の事にて家来親類中の事なれハ

世の人は関東の御下知と云ふ然りしに中にも山城
長門守横山山城守長知と謀りて江戸へ参り人質
留りの事を申し遣し家康小松前より長知を下
遣わし置く十八歳出し又母君は前田家叔父婿二
蔵右衛門人高山江戸坂井大炊二人も若年の時より
とて前田家と三道山利長の陣へ申し遣されし利
長海是なりしに江戸よりの人質と二の丸に移りし利長
此事なりし門へ大と申すとて前田家より出し江戸大門番
として居る小松中納言利常と申して紀州の利長の
者なりしが家督を相續し利長より三

代目なり
小松中納言利常の息筑前守中将光高の家
光公の女と御婚礼ありし光高居中と育て
加賀大御所と称したりける後援出来近代の
加賀人の寧桐総記に御事は家康公御孫
なり
慶長五年九月日母君前田の人質と為り小松城太守
掛橋への川留として前田家なりしは門大夫と同道し
山崎長門守横山山城守と外大路使者し小松城中
なりしは江戸に参府右馬坂井与右衛門大炊與右衛門同道にて

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ゑれ因礼有て静りを掛合大手櫓門右敷の一ヶ所
連立て二ヶ所引替二ヶ所覆ふて霜り前尾張
大勢之れの衆を放有れ風らす遂有て和平再ハ
破ゆへいかう矢雖活り数万者守さし家数万寅笑
の上家老方へ示し合かしと和睦和睦有し故安
家長久の基なれ
此度治定之節右筆長宗へ差入し處ハ和平大勢ハ
皆も平定寛東方の御利運と成りて此度一戦
の御発有るハ必定様ゟ付手前なり城と成之中なる
様也利運の段左右有りして只思昔し古きも又

不定未だ東西の様成へ二なら前ゟ早く當城と當家
へ相渡し出勢居てより此後直城して此中なるあらん
此之母様両家親類中ゟ之縁共の説入雖立る事
は中途の事となし合点と有て内府公迎右様様
不定ゆへ入り差衆中へは家長宗へ評定有く治部少輔
ならり寛之天運治部少輔を内府公への中なる
小松城としても一向ならす遂してゝも早くてもなし
人なれハ早く此ヶ道前田家へ規模と存すへしと有て
其後中へられハ利長感入て然も何なれハと可然
紀之介ゟ家有之ハ来て近々様ゟ御意成て申しと

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と有しかは江口云ふ者庭の甲中へ進出て紀帝守殿
の陣前にて申しけるは当家度々の出列庭の中にて甲乙の義
評せんも如何心得けるにや浅井殿始合の義
を追年家政の下の義家と称する清家諸武功の感中
ふ及ぬ武功の名是を称ふとやこの甲乙の全義にし
とやて存候て先達て長年右衛門常かるし業申ね
方の感状と押へやれ後志もらく年間再立にれる上に
も有しかは当家武家にて家此義を押へ由を甲乙の文字
合せしけり甲は十干の初にして有名の効ありて乙は
十干の上にて定める不足の所と称武功に大過なり余の名

を甲しけり甲を別ゆへ古来は甲士と云甲乃者と云
も此甲之乙は據之称す源義家朝臣據ある府の後三
年陸奥守よりし役後三年の戦有し御味方の陣前を
おはし武勇の士の據を定んとて甲れ庭と別
の庭據の庭を定しけり軍中に甲乙の名を立来
ぬ據は是る浅井縄手の始合後日の沙汰は此浦浅
井山より尾張へ出し際と称陣を感年宝物
にて小松殿嘆ぜしく進殿ある家勇等は甲木下云り
取りなし今後殿の中をけ但馬守家臣それをもる掃部
ツト志して討し橋にあり追日の一書にも松年久を称

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

物とて別して極年久しく勤め来り額すなはち若年より
勤めし長宅まて百石の身上よりして五百石まて下
交はさせも勤めその後し今年の仕合しき成ける中
にあれは利長慎みましく前の家の家老中老
並び若の若士ははまた通る政も武道の吟味
定き家なれは千五四千程の籠とあらく仕方四
万の大軍を引受割へ江口一手とありし籠の
中と言切浅井山と言ひまして武備丹羽長定
馬上にして坂井大石衛門まて籠とあらく論したり追手
よ進み金沢方を勢きせし武功今日の七本

法の甲乙の吟味中して天下大名の家定しとこそ
大名の武者の吟味ぶるも又まひんとも不る通りの年
本国安堵の者大名とく度ことの外し本丸の其と
我家内者の出入とりせしとも並みて政くて八度の籠
も呼酒宴園なりしるは長宅差とて利長へ返し
納らるしこれ今の交り物み有りし中のとも諸出し酒宴
終りにあれは長宅席にと立給へは利長も本丸大手の
猪形まて渡りは長宅の神と相へ帰身上の御
以若号不斗まては什上八利長身に望し宮本衣老給
このは志まさしの御機嫌は年寄の口吉ましくかろへし

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

多や於ハ直江も兵ゟしく会津より柳原源右衛門と云
者し景勝の使として江上に馳れ此度の大事首尾
能く仕課ふべきよし掛りられハ源左衛門といふ者
上杉家の年寄にして城をうけ取り約束せし処客ニ
越後へ来りて景勝に上と直江が如の通り申けれバ
一入感悦なり八月下旬景勝より草野為兵衛長尾
喜右衛門新発三郎左衛門杉原親人矢田浦彦兵此
越後へ遣し此度一揆を起し国中の草莽代の加
功を不忘ば後景勝漸是ふべし是又右の武功境
と潟より会津道通して打出しとおもひと有れと察

此草莽代の識同年山県在者加賀安堵下有し
との申渡給ひけれハ国中の一揆の者共此力と我もと
しゝ立ちて上に治国中ゟ旗とよるに至る
彼ここの風定まる国に七月廿日に従う方の勢
定まりし柏崎三条迄と始国中立ての人記
一同に蜂起して是れ共出るハ古老上杉と慕ふ
故なり九田左京三股ニ於ゐ動ゟり樋口与大寄
右与板の古城へ入城して皆と共に是とえらく山吉
長門守佐ゟへ入水与板新大助左坂与太郎打て
出しかば大将ハ東南大潟の海龍寺師里の如

ともかくに清方と結びて清水村の一揆勝して合て
先ず合せ何まての城ととりて責落し国押定て近くの
或は上杉城中より海老名の兵方有て中より大軍を
寄せける時嵐辛島の書状言すれは五郎院へ葬
り家中の国中物語の外なれは後より入出家
有と此戦逆結びて物語より中来る事も兵火寺に火あり
しかれは海老名の家中は上杉家へ大軍と存して残党の兵
中られは信玄山岩石坂石坂に陣有らりしと示
知上杉城より此何んや來し兄不可逆右と服通
ける所七月御中大勢院へ出家有之人を先へ立

死人逆寄物と号して力量有る石坂与太郎と号す
後より三十人斗とともに追出の手上りに頭を下して深物
其大勢人を打治に呼寄り首を取り大手を開けて出
家老業同名して此大人と申す戦は其家老家に下
然るに寄り兄を六度の清水と有るとて
女の云共に逆中としたまひ此家を討て降参して出入
起りて後より出入して寄せて内へ入三十人斗の内
は逆波を交りて兄右早三ヶ所に火を掛けり是は
と悪見えたる所を防ぎ大勢の家人深くして打入
一時もかかる内に攻めて討しかるに方の方上城を退落

しかハ一揆方前途よしと悦海部庄の与柄
を覚し兵十騎か女房とかハ棧道火中へ投入く
川辺ま也百火も某設けるる葬礼なりしと時も
笑ふ∠揆周とよそ勇進し伸さしく言代の
物なりしを秀政ハ堀左衛門督秀治要之を
して旗下の与力大名三人有りハ此人の所爲なり
堀秀治ニ春日山に在城し家老堀監物直政
も一所よ候居なり但し監物怨ハ新発田五千石
三条城ニあり二男丹後守直寄ハ六万石坂戸城
ニあり秀治家老の小倉主膳ハ下倉主城同郡

子同八右衛門橋尾主城是より堀左衛門督枝城なり一族
の堀丹後守親重ハ長岡主城なり今世堀丹後守
三万石蔵王村松外是ハ家老堀監物直政末なり其外ニ堀式
部少輔堀長門守秀家五万石家老是ハ二代目の丹後守
直寄二男なり右衛紀の末なり
堀大和守信利飯田城主二万石
是ハ堀久太郎秀政ハ左衛門督秀治嫡子
堀美作守親重除か親良付まて
溝口伯耆守秀勝新発田主城五万石
村上周防守義明本庄城九万石

一揆方石坂与十郎・佐久間之丞・水有坂訪兵衛・寿覚院
海龍房此日上乗職と云者を引て寄来し給吉
登し千葉人の人数にて吉日山の尾城と云所
しハ山中の城にて其處ハ下旅村と思ひ
ふ出度せしを不欲ニ至りの澄者なり
村のよ吉田山の家老塚监物並役ハ智覚と道し
士たる山中の物語とすと言形同外侍と云て一揆
方の沙汰せず打し寄出へしもそれと云れ候ハ沙汰
せよし百姓の内ニ有者を入るやうと出来し氣色
監物ハ知り而の内ニ山中沙汰せし律儀者なり

三河ニ亘り在来りし云者あり人ハ此者大名ニ名者にして親
孝行の事ニハあり是非し寵愛の有者なりしと思ひ浮
し右の者又人と呼ぶ家沙ホ叢親孝行の沙法案内及去
とハ寺銘前にの方なり親方成百姓来りしへ此家親
子四人連れて来りま此家の國中語訪ハ一生乃
るするれハ是を静よ百姓共ふよ農業耕作
行営ミしし共に有り沙ホハ大名にてよ有村ニ来取
へ一揆方の欲中へ編入りて出訪くしと申にて
沙ホるを安穏西連者の事なれハ欲方沙汰是し
ミ国何もすなりし来留るよ之あるハ有して出來急之思

日本一統志巻第八十終

日本一統志巻第八十一

目録

一 堀監物越後一揆之衆反三股石坂と討之事

附越後下倉城之上杉方一揆大責ル之事

並下倉之城主小倉之后討死之事

一 下倉之城ゟ堀丹後守後詰之事

附丹後守一揆悉討之事

並堀新発田在侍士之村上新発田同揆会之事

日本一統志巻第八十一

坂監物識後一揆の家臣三段石坂と討死する事

附織田下倉城上杉方一揆責る事

并下倉城を小倉が落城討死する事

於是國中の一揆大に徒来して事を通し迂切なし

不及中城へ押寄る處に六月六日先為於何しの城をと

池田也れ大寺と集め寺中へは不出してし在ゝく

の在城をふる所用んを名都さて頼りかり於る処

七月十七日は右長山へは所に入くこの押寄る者共を

くり業風さより出まかれは千人の人数はそと落し

酒盛有りしと承るは大酒呑て砕けらるへしあ
きしへの大百姓の荻原しき良の角よ唐の松
如く成なれし石垣なと始め追手の上段の構なるへ
と数し積み堀塩も能くれ数へられ三段と給
ふ何くと知りて是より方へくしと山の中なるも
堀ありて周囲よりも橋ときし今時み限りて掛て其
ゆる味方の此利運此橋りしを堀は広し深さは深
し池もなく如形し只是は深き深田堀
く嫌しやと空なる所へ仮にし橋と渡されは
前廊下の林の中よ地蔵堂ありしは不思議なる人

来りてとし一揆の大将是に在りしは久世の内談堂は
値の地蔵と在て渡れ極楽寺より仰し庄
崎の方より常に出入は城郭し私は中海寺庄の
大半の使に来りし所ありは地蔵の津より地蔵
の山廟子と家人寛出し何某は出ると存されとし
三段原の出中させ寺田の人屋根律寺共在
何者の使にて俳女共若しかるまし我と必はよ
なし新汁の真綿石見は今の業円寺廣和寺
不残数は律寺共堀塩等太に攻とくと業円は
浮しき梅岩と三ま又おうて三百人とおす程挽みて

大百姓の家の上ゝ上ると云ふ先を懸之梯若此間くゝり
無き切て出しハ必定なり不残討えし二百人ハ家々
下へ分しゟ右坂之広庭ニ三段ニ深家地蔵壱ヶ所
仕しゝに小屋ニ而囲しハ薄く植られて分り
留場ニ組の中ニと組手の名人ハ其一のみ組にて此附
然し声を懸るみ不及戦場とハ遠くして忠手乃一
揆ともそれ討たれし家風上にれハ三段之後の外
西へ入られる

松前八郎兵衛　門役務同

下割百助　蒲野十郎兵衛

右西人家一二と作て先地蔵を拝へて門外しれハ
此ハ地蔵節ハ木松前門役月に同と云合ハ
作のみ地蔵之組しハ地にて遠接との地蔵薩摩の様
西人組て不節とハ何成大曾極藏の説も聞なし
きて出にしみ是ハしくと押て不節門とし上意して
節ハ大方せるりくて其松前出てへしと云て先祖と
見まし振り付けましハ出ても出人不足の地蔵の胴
中くと大振にて志へうしてハしゝ後ハ門しれともまて
様し從不知堀留場之懸て節と存る是ハ三段留
有て大振を寐とへ打しとの分ん切て殺しく

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ぬ石坂猛き人の勢ひ烈しき討手とも不知者共ハ八
十年の積会稽をなして如何やしく悦くや
つとめたる積落し流石の石坂程なく精力尽
励しなれとも年より十七年切捕たる八才三年程ニ
下知殊不と覧ぬニ掛く下知し今ハ六十般ニ長柄
の者共をもや石坂井れ如く深くハ何の事もなく
強死にく討たれも射ても落せし下知せしかハ
得気の方の者共三十余の一の矢と八郎返し交しかハ
鬼と聞く石坂与十郎かたきを倒まて果てたる完
城主義立寄前にと討落し如此者代の勇士なるか

上杉家の士ハ浪人しても他の家の仕官の武士
となり励しけれハ大百姓の家をなたし
前尾と金家せしニ於ては聞集りたる一揆の
者共八十余人寄来りたるを押寄せ二十人
ハ討殺し五十人ハ討たれたり覧ニ皆実にく
も九十一人討死しぬ是より八郎儀ニたり大和院
ト討手海老名と下山捕して与四右衛門と出し之
捕して捕へし急しても海老名ハ幸と出し門前
の百姓ね用心様子ある石宮の中にて首領して
居たるを与四右衛門吟味し石宮の口と完

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と探し出し生害しけれは一揆共と百八
十人討れたるとぞ申けり日吉方にも一揆の輩大
勢流へ集り定めけり此旨申しけり有坂諏
訪印守備之ら七ヶ所同情神保利知四郎
又書有所へ引れけり
此事雲宮能浄池の地成古卑より軍
のされは一揆よ石浩此所へ引て地
とぞへし
此れ書カリ所へハ会津より越江山城守方より
来りける越後国中の将軍長尾為景ヘ訴訟

八郎此事ども所々成国しく死と振く九田左
京頭日宗安共と諜し合せ上杉方の一揆大将八
人ともよ随ふ浪人武共三千八百人兵庫中の此
民上杉家と募は寺門の僧侶僧是会く三千三
百都合七千百余人只そくよれば八月朔日の辰の刻
下倉の城へ押寄せけり
兆し此三千三百人は此民僧侶の中より越後へ一向門
徒宗者き国成同行と寺灯喜生死と同行仲より
共一向專念とちて古来より本意は浄土国より
上杉の思ひ也けり又随年来の味語りさる成

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

ほうり寄せし井手て入りし雄声と揚けしら候
炮烏と同と共も不忍強おし御しらハ蓮正寺
と呼らして城中の小倉方の者共大軍よ砕
出しし一足も踏ざりよめよしみ浸しし上杉方
の門徒同行の一揆とも南無阿弥陀仏しし名
二ヶ所の者方と上杉方の一揆士三ヶ所よ於て
戦しし掛念仏して入道て命を捨てをとし
ふハ大同川の方川城を川て入ると一揆方ハ責
逃てし宇佐美ら水深ら之れ来りしハ流石勝河
ち定行ハ智程為てし馬上りして宇方をとえ出し

大ハ軍ハ味方の様なりしとて風よ乗て焼立候よ府の南
横井みせよりは城を南向なれハ城の風よ向く
頭より付ましとて町屋へ火をと掛焼立しらハ兼ん
のかくし城へ吹掛り火煙よまくりて掛きハ城中
の兵方彩へ煙を以吹付門ふ中て是なかて不及是
非皆しし城へ川入道兼次刑部七寸あか下盗也
持挽きらへ三ノ丸の揚ケ鑽門を立させ於賄
入り穴突て入兼次七寸あか太吉上けし下倉の城とは
兼次刑部七寸あか下盗る一番の者あはし名あらん女
人の雷響続て一揆の上杉方戦しし声と合仏

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

と二柳子に語りし吉の子の柳子揺州にて海を
渡り揚り三ノ九揚饗門の内ハ弥次七すなハ
と左右に立並ひ八人揚饗二人と宴席て立せん
しとて海路の味方と入んとせり小倉ニ揺乗て
朱黒足に蒸尾の甲見へし演黄に沈むの渓流
掛穂長の綾を揺出迎て黄威共に揚蓋二人と示
居りし歓の前を居せんと命を揺しこそ御出
城の揚屋ハ竹葉の家にとて招入てに籠城の本
人小倉越しき御とらんて名を励を士其十ヶ人
踏こらへて中ほと小倉ハ歓味方菱のこと〱總

合の手中と川接しし　柳き例し宴例し七人
近宴穀せしハ大勇の總の上にはまり辯弱し
吉の子をみ子の内に吉の子方弥次刑部ハ深に更て
旅に前をえしてまゝと七すなハ照而城の内の總三
茶し宴合なりし安弱押ありしせし柳子上校家
にしいうる常楽軍の内にも宗派とよれ掛る味方
の前とハ歓兵へ流れて出し流派の軍礼と須人
なりし今なりし字まし御し七すなハしと示頭共なし
於ハ神路ハ前をえしせしと三本の總命大なり［本ノマヽ］
ら後にへんと成りし於ハ角人に謝ふ庇居にみ

胴し取るゆゑ（二十年の後左右の揃ハ実ハ入らんとせし
と聴えんと崇らせ左右の手ふるへ不働やう又
正西より走中へ入る時と謂ふて聴音深ハ家て
屍の實也し節の後武共右ハ下ハ川流せし屍よ
三力の時ハ少し節も味方も負けハ此度よ亡難
揚嬰門と小倉与得立跡し其ハ蓮正寺猶思ひ
て検る所りして後胞と弁せしふくもかしよ家
法る此城とすみ出されしれ江之
新て誠ほ国中慶長十五年七月十六日より大に乱生
物語前よりト部本召難又右衛門堀左近監物本治

ハ後人堀監物直政ハ二男丹後守直寄ハ天性ねの
採るべし若年より古岡山直宗よ云百安院前と
称し十三歳より指長老と師とし学文と好む
後論のすまり後城長に雪も又父兄よ誠ある武
の道よ文武と道ある覚悟ありし当年十二歳之
しハ慶長三年より坂戸城を預り十一歳の若年
三千石の知行を下知しては謙信時代此家大切の
城なりとして小庭丹後守を遣し坂戸城を堀
父左京亮侘利信和泉へ国智の三百姓とかと此乗有
しハ堀監物と十有し二百廿歳の丹後守直として出

し夜寐なりしも積雑せし食むるあたに休しても不意
の羽島と人樋羽島と川立所とも中ず八月朔日より
下倉城を上杉方一揆方の兵七八千押寄せ鳥とも純
責手浜田の夜中にせめし落しく小倉を揃ふ意
難と下取用意せよしと城々半分手あるる路半分とす
出たる家臣此所老功の物頭半分残して尽し
りけれバ其日も其れバ跡あり只今国中の逆乱一揆軍乃
業なれバ中せたる所是会津上杉家よりの中し納〆し列濡
の本人と嘆じ直江山城として國中の城々を
責落し再上杉の手に属せんとて謀議向ハ無れらぬ

聿よりも猶次に答べ本城へ参して守りし其の家本々上杉方
の一揆に不り貢落防戦守衛の用意もなし打寄せて
なかりしへ下倉の兵々攻めかけし指遣して備へる
の旗とこの貢しの謀とて知れ家角羽茂の孩名とらる
ハ他と出す上浦家ハ立とハ一切自将で名とともるの須
まりし主人とも出立しも為すり丹後守出亭大別の
一族よりの家来なとまうして眼み一揆方の押汎と忠
服本元て下倉の後浩とせん自分の城に居て居くて
一揆方の尚城へも其家来別に下倉も又攻落して方やまず
らバ隋雄とえ弱しある世の情そ上尚城へ移り

其日山を切ふさぎ言語道断二度矢にあたりて負き
かたく後に本多と大津と存戦場へ出つる所也の其元
と右近をも志成なり支方方の者城は志なみにて残て
居よ丹後ちか指揮する後信せいて武士不足一族
も後信百千首も被為後信の利を用し余一族旗
さし右近か識し丹後ちか主君を守てかしこえしき
らず斗りても軍門のれは立古年をらず切り城
へ入る千人のか皆なり後信是へ渡し云運は命の
もろ内にて六里は侍をつい立てし貝とは自分吹立
し馬川おせし大手へ出ではにて拉し旅一流馬

出しの後より飄と定る生は前手の家来来く
し馬の者存と望めしに僅三百余人丹後ちか池清法
立上りし適皆は武百人を拒軍より馬出す百人いて
敵を破りんとす丁常の間にもりと前進のゝ後殺の
策略しと察出せれ城中にもりも中花なる本旨
人出ひしの出立にし海を渡て立てり八月
数日世の夕刻に坂戸と云て本道を千里程夜
寺内に望み二日の己の上刻 此は上旬たり本宮下 下倉城上道
一里ほど前なる長坂にかし立て得るうり守にてる弟稚と
寺世馬を左何為馬の息とも陣に在兎

大よ雪とり
城の方ね小倉主膳ハ蓮正寺ニ向ひし尾ハ兼て播丹
後ち坂戸城より後信の凡そ比摂云の不通者家ニ城
ニ奔て出しよと追掛ふ又討死なり二万の内ニ除る
ハ蓮正寺作兵衛呆ても覚成ハ寺ちし逃行ける者ハ播
不入門ニ至信し実ニ一息二息の内ニ在城
しえける所奔て出んとに行ずむ城を立廃せ十余年
に残討死せん丹後ち後者ニ入し寺ニ入れ後信の皆の
静と待つて奔出て利もて寄る用ゆしと割出るれ
小倉主膳欺かし覚へ僧ハ落城一而の利害を説くす

僧後ハまて至る後秋木け城と守て一揆と追掛す
非如何の呼の覚如丹後ちらに揆云と役く欺を追掛
ひよる時ハ末代迄の嘲り待文覚東へ出ても小倉
主膳ニ非し必死の非と若輩の丹後ちしん不叛命と呼り
けるとゆ信かけては主膳ニ名とまつって丹後ハ名を
揚るよしふよの之口寺の立流と雪士の情ハ遠ふけり
討て加ふし討死ハ丹後の名も武士の不覚各二方ハ不通
ハ城とせし丹後ちしと待ちて存命せよしとも不案
まの共ニ集め沼甲六十余人と左右に立小倉主膳ら
ちえんとみ徒の徳かんと持へ寄て出る者よの上枝

方一揆の大将七才許と見え宗佐久主水六百余人
並よよ旗と開く方鉄砲と先にも押出し数
よ射手より小金ヶ原は火を切る討死数人余
の者と一塊よしして射手とも井方は二もあり疵を覚え
よ突かゝへ黒煙と立て鉄そろへ宗佐久七才許
五百人小金ヶ原の六十人余切立二丁斗川上る
けれは原立返して大手先を望めは後の兵も見え
さるよ逃れて追て備よ宗上杉一揆の二陣の松丸
田左京亮日宗安井藤八郎三千の組左大宮三ヶ所よ
備へし表へ押寄て掛る軍中より長尾左兵衛尉下知

しても上杉流の九段口へ一手にもなくて新手余人出丸手
成く左右の方より堤よ添ひく小金ヶ原と並切らん
としたりより宗佐久主水後と返して宗主え原成
新手庄兵衛新発百余宗源兵衛二手よ組城の右の方な
横ぬしても下知せしかは物別まる上杉一揆の者も
千八百人右の方より後合を作て突て掛る棚際
源左衛門大音上て城中より突て出しぬ大将ねしよの
小金ヶ原は井川包て井て見えき後ゟさゝへ討死れ
八左衛門城ハ今の内より西面より突て掛るは宗佐久主水
七才ばかり見え物二十よりへ続ては棚際源左衛門尉と出し

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

三方より寄せて揉立しかハ小倉か手勢人の若
者残る所なく散々に討死けれハ小倉か従者三
人本丸の大手へ落行しか共ぬけ入り
来る大手を捨て西より掛る千余人の中へ切て入
十四人切死す其手の物ともハ宇佐美か水を渡し合
切結ひ亀もと其の者とも其人も余すに不残合戦
其人の騎馬ひに切て廻りしと宇佐美か手の者とも
廿人余川迄小倉か後と続ゐて揉んとせ
しか勢ハ方廿人余の者ともも橋を踏落しぬ
し亀井か後も城の中へ落入らなん太刀の者

なれハ是非もなき次第と岸へ上りんとする所を其手の
上より宇佐美か後と掛ふ寄せられ稲被
に乗り鬨の声あけて追付て討死しける亀宇佐
美かよの者共大手より城の大将小倉か後より方
宇佐美か水討をとり
汁宇佐美か本の臣に三川中島二度目の合戦に
宇佐美殊ニ等候しけるを長尾景虎入道玄
実返し謙信の氏家と同時に宇佐美か居間
と云し定行聟の嫡子て主水なり
小倉か後討死しける上杉一族方無事一家になく

下金城を守りけるが持こたへて蓮正寺多勢なれば
坊主どもに嬉しく持かけ毎度武勇を顕しぞ招
討死しければ何某討死ありて急ぎ援兵の来り
まして死ぬ所を九死を免かし何事も此方取て帰りける
かくして一向宗の日蓮宗を大きに悪しく先を殺
とも南無阿弥陀仏とも南無妙法と家と大
事と清水寺の援兵急ぎて持こたへし一時貢けれども
雑兵叢とかくして持こたへ
下金城へ丹後守後詰して
附丹後守一揆籠もりて討死する

無坊雑兵本介援兵にて村上新発田援兵急来り
折りしも坊丹後守寺押立ててかかりけるを見て
程よく寄せて押上りて寄せしを
と上りて足元定めて来り寄せ上杉一揆も此日
今日二日一夜息もつかず戦しければ一揆の者ども
る所へ新発田の丹後守追掛けて寄せの軍兵
く城兵も振り向きて城を討ちとりて蓮正寺
下部として出で城中寄せて出でけれ共押
開き五百人一度に吐きと寄せて後詰を立て
余勢かけれども声を励し切立て突立て持こたへる

に寄手一揆の中より出たりけるにやと見へ早く丹後守
走入に寄ての子く宿所し給へ丹後守方へ討出
首級三百余中にも赤岩讃岐守郎従刑部と名のり
て家臣に有る掛ける上杉方一揆の大将分の首六つ三
しかば寄手に勢ひ衰へ弱く川を渡と寄手の中に歴
々の上杉士卒しかば直追の入合と見へし互に知らる
家臣足元を不覚して其にしくと覚へし川
しかば城中の将も城を出で追てそも此の能其にと見え鬼
しかて返しても宿処を見とんがけ大臣しけるに返し
いかし城を攻めるに家入へし桥成を聞きて人も利なる

丹後守家臣振立く部の中を分切くし武士振
りし去徳川家の永享年八月廿九日に竿しても感声
頗る多かり
而して丹後守走寺ハ下倉城下町焼落に陳を立
城内へ使を立られハ蓮運正寺忠左対面し丹後守
と城内に在使を承り一同に甚田山へ及陣を立て
此度の加勢後待到る下倉城寄手の大将分
宇佐美主水　九田左京
朝日家女　万貴寺郭北
右書付左へ川を先立て川を渡し　柿崎源左衛門

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

しかし浅倍の交は八千余人行役を波ちと大ねとし
しかし中途にて寝返りしかば新発田重家我居城に案内
通らんとは叶はずして布して敵と思ひて立る山の麓
弁ぐ獣も難通り深泥へ乗入りて菅名庄の城を村上
同群なる新発田の城を溝口伯耆守秀勝へ加賀より使
それとこのきとしてしかるを大軍首途と寝返りしかば下
行しかるにかしおりふし菩提所の蓮正寺より出
山へ使僧を来りし者を人新発田へ同道しては
来へ来りけるが進み出我も加賀にて兵を出て
新発田大に悦び右の通世者を殺し所は坊を中々

者見舞として探として一揆方行役陣所より来て
来り塀新発田陣へ遣して一揆方救ひ
行役が陣中かしらも不残は何者か尋ね者なく
剣へ不役のなりとして帳に一揆に立まて居し
亀は宮坂明し
信して三条浅倍として村上も深江と井上なりけるが溝口
白老切の大ね在井なりとも上意の所よりも一揆を記
と物頭を呂次郎右衛門井出左衛門深江左衛門と申し
所同長百性どもの人質として新発田の城へ入
よしと云付出る世しかるに三人物以七日町の宿とるて

川を渡りしに件の川渡る方の者七八人并合
寄せたる者共を急ぎ切殺し後の方には溢れ出る者共
百人ほどかの城の者共打殺して川へ沈めしむ
兎兵吉兵衛は端出へ大十人斗りて陣より連来りし
者共を是非なく放共を川へ追込み御所
早打をもって此方備前へ告しに三里先の陣立へ
告知らせ溝口・小西と打取り我先に急ぎ馳せ
し陣を入合せしも是なりしと在て追し七百余の
皆にて城をとり三つ打て合ひ川に陣を構
者をもって本陣城へ遣し此方告しらせ村々周

防ぎんと拝あらせて外曲輪をせめし番橋を城中へ乱入
一千余人にて打たる此れ一揆方の大将小西三余
万兵衛等加地所衆の西へ八千余の皆にて大泉
に至る陣しかし事を悉く備えて揃所へ兵を
揃り起し蓋原の中に打ち籠しめし溝にて打て通
桐中を実割深く下と打ち兵を寇壱之の者とも
思ひ居たりしに溝に先手の者とも書く節にといふ
物頭三百余にて馬をとらせ集まりしが門端に新
き蓋を打ちし者彼の陣へ守り兵は只今爰に
敵いる本陣の大なる門を此所の備へ打てとどめける

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

毎十二ヶ所ニ焼て後堂のあたりを荒しと三条城へ
帰りけれハ三条城中にも毎と称東焼続けて
其詰合あり
八月六日ニハ村上周防守一ノ宮ニ押よせ本陣より押て出
安田野ニ陣を構へ城方にも粕谷ニ押出八右衛門三百余騎ニ
て橋尾城より押て出是も三条陣営と合戦る
八幡に村上一所ニ於て三条城より三里はかり陣をとり
ともく毎焼く後陣の追付るよと見しとより三条城
を攻新宮党ハ右の城へ向ひに攻しても里郷の山の
中に陣し遠見せしめ右の山中鹿右衛門と云

士ハ山中鹿之助幸盛といふ者武勇才智逞しく大功とみて
因名を免し宗弘ともいふ我か家名をも相續せよと旗
別上月城より出羽守新ニ陣構ノ地をかく進め
新宮党ニ附属しハ此家の用ニ立て僅か千人と云て
却て城中より打て出敵を追掛け九度大勝
の士卒打死し其後出頓ニ事ふ後堂の勢か追付
先にと安田平八郎宗派を招きくと下知し
其混と拙を宗臣し先に山中鹿右衛門通を敵とし
櫓と見よりく手綱をとりく宗々く拙る安田の馬を射る
原鼻先にとめつく宗あれと執ても難るき越者成とも一所ニ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第八十一終

日本一統志巻第八十二

目録

一 家康公上方御出馬御延門二前家之面々来ル事
附御譜代之面々御酒井下御大久保忠茂等狼
藉之事
并桃京武頭右衛條々御中書不都理之事

一 清洲ゟ為御使村越茂助上ル事
附石田三成味方之面々ゟ加増約束之事
并三成岳父之武井立入御読ル事

一 伊東長次無恙居城ニ還出ス

附嶋左近依智略大垣之城ニ在る

一 其三成於大垣城ニ軍評定遂しとなり

日本一統志巻第八十二

家康公上方浅野弾正浅野延川守度々飛脚来
る

附添譜代之面々白須田兵部大久保長左衛門等
根著之る

其外京武部右衛門依智浅審許拵證之る

斯て内府家康ハ小山在陣之甚浅川掛江戸浅城ニ
引為入徒門譜代の面々大勢出る事を帯今度
ハ天下分目の大合戦なれハ関東ノ命を抛大戦を励
若と天下の武将として手段を尽し捨ましとかや

一番上方御所之御使にも不参候、唯今見合に始まる事
相手一同にしては従門の家御一族は不申及、大小名
の面々其の外人々、見物に来る柳原京屋敷の方へ御座
敷の合せ人へさへ出合と不急上の御戻御幕下の衆
中も手を出して取りけり
先陣に来る十二日の大名衆も御先手の備と
成り井伊掃部頭の藤堂和泉守の御先
鉄砲先手御目見と一所に上方へ宮本の御先
大名中先陣の面々は尾州紀州御両城へ達申す城
を左右御旗本正則並二万の御先手一の御大将

とえへより辛き正月と始十三日の夜中も八月中
旬に館の御先陣として本陣とゆへ其一面を
御出の衆先手の者を国府に書付上方大
軍の御人数を館の上人の内に旨を先を向く
せらん宮本方手先の指図、究と始て八月何事
小にしも然斗の郷に陣と見く井伊掃部頭人の逆意
勇合と覚え手を出しも取りけり
従しと申、又脇より立ての池田三左衛門方より前後
の先備本多正則方にして本陣と指図に大将御
旗を立て御従類の始として先鋒の外也

相成候は進発可申之旨中納言様を以て御暫御控被
もかし〳〵余り延て江戸表より松平周防守殿
始め毎〳〵御辞退を被申候得とも御許容被申上
置候しかりしへも此度御進発可申之旨相成
候故御待遠被仰候今日か明日かと待兼し
けり
掃部頭殿は近江の第一上首の大軍は悉く進み
とりかゝりを以ての深き所存の有りしと推察て
主家の為中老人もありし武時上京承り御補佐
春御表諸士事に参御由依天下治乱深く案盛

甚の儀より御拘有ける右殿へと存知中にも
候ひ御幕下の大小名上方御出馬御指揮の御座
之候も主家より承付有候はゞ若年仕候る
候ども定て御深志しこの上御軍配の秘蔵しもゝ
有忠主なれは照見案り清閑表の大名御為也殿乃
御家人退居可仕旨の御意りと主命なれしかし
世は家康公よ中りを御機嫌能哉啓せ給ひ上京申
通り清閑より度々の催促高也の句同意の存
念より此度は家康拘申の思慮にて御答なり
字ゝ名人の上にも志ましおはりし御前の下より

上杉兵部大輔は尤も徳の御祝儀として金子被下候
下野の守殿へ式日に出仕致しも不苦候
其後は去る頃出仕せしめ候御返しの為に附候
しも在府中は時々登城し御奏者への使者によりて
城御待にはも還府の上は毎年出府の節
八つ宮の東照宮様御社参の節生涯の御奉公
御使者の節り御用の節は御出仕以来なり
三浦の例より初めて参府の節御礼有之しかれども在府の
下屋にはて昇進後有之處申御使に出候て付届
西の丸へ御名代に足の節御中へ参り候も有之候由間酒

と申ものにて登城致しけれとも其時に依りし
御一族方御譜代の面々と同く御出陣の日御供揃へ定
めの御祝酒なりしと召出されて遣されしとも慶長
五年八月十一日御出陣の節御供之三河御譜代
の中まゝありし

大久保彦左衛門　村越茂助
青木九助　小栗又一
酒井忠之助　渡辺半十郎
筧助太夫　横田甚九郎
平岩七之助　菅沼小大夫

大久保權右衛門　蜂屋七兵衛
布施孫兵衛
と始として百八十五人
甲府組の者より
横田甚五郎　城織部
初鹿野傳右衛門　伊丹玄蕃
坂本內記　曲淵市兵衛
植村左太夫　古屋平三郎
小幡孫市　河原林傳右衛門
と始として百九十五人彼の所にて行て平川三郎

の陣殿より皆く集り御門閉しし吾押出より
御門番庄ハ是等の狼藉を今日の恐や城之入
下知よりしかりす城ニ時とともに遂ひ右ニ落十人
三十人ともに遂て四五百人の敵やハ通し難し陣田
人家中の者あり十人斗り枝突出して立切より
横田甚五郎次まりも不入として其の跡ニ夜行て
も敵はても遠方まて出し城より行の道を寸やり越し関の
不服ある士あり呼寄せて植村曲淵親讓りの籏
家来ニ持せて川出し城へ埋めさせと云置大久
保忠佐ニ持たせ云は是を掛けてより見ると云て陣所合

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

も六ヶ國にありても七ヶ國の大名を攻ても叶ふこと
能はぬ仕合なりとおもはぬ殿はいかなる略にもと
なくなるは今日の出仕巳の下刻より年始の寿を述
在来朝より諸役人は殿の大切なる下知を請さ今度
の軍にて東西と分りしは二つ一つの天下分ヶ目と
可賀まで更へ何程攻るも行候探軍仕る好合
とも不為ニ花飾れ共唯一代一度の大事の場と遠
嗟とおもひて各語りて宿皆一同に申合は謀
とも白旗大将は上座のかはい三河譜代甲州士卒門
の一天神へ集参時々宮の一天何んともかれ

すてし殿と廉末に思ひなりしは何んの遠慮と存
れしにて諸士その言は七ヶ國にて一度に合すい
六ヶ三ヶなくと出しても勝べくなと首抜出して申す
之我くにも合なくれさし斗荒布菜を惜
してる天下分ヶ目の軍には捨身てかくにも施さふ
とかされよとて主蓋尓の志中へ足投出しく詞
出殊なれは他家にかさき譜代の我等一とる極の
中すべ出年に立しらは内府公も苦労なる志と
いしいらみ今爲譜代のこと也ねいとて施と捨
せし様一度と云止ぬ者有なり持ち捨去く中

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

相手ハ織田黄門信雄よりて清須向ひ江戸表
一両出馬あらされとも清右切にて京橋殺方の大軍
を以て守頭大を押破りて南国へ乱入は先隨ふ
諸城悉く手傳首級を捕帰みさりしに清城と歎方
へ渡しは後前ハ無し但ろ某ハ以て出陣へ入り申上
言も未る後来る奥平九八郎ハ家昌若年なれとも庵の
立中へ乞出閑情ある度の計を立てらるゝと進はまた
其以来清光よりと計御ありて一方を守候ふて清
城を進めて下文書清城内江ニ向て忠吉より清昌
を其所進成よりて御付て父信昌経にて江戸出て

長久手の戦にて競ひに成りて二番を下り
ハ信昌ハ物をと誉を播して只上りしハ實は丹
方の血筋と云ふ父信昌の大事とを存せしは九八郎
名實ハ威名
此九八郎家昌よりハ奥平美作守貞能孫
にして武者も信昌の子なりと母ハ家康と
内府公清使を重て家康公御息女亀姫君なり号盛徳院殿ト
名の義を追ひてなりハ家し一族と處し
譜代新参かし乃ち情義武事せハ澤山なり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160
ガラス使用

湯一族松平の湯家門派して出しける所富家と云て
家にて此ハ康政許ハ法務花族湯の後共なとも近
る様ニ移して山の上より道者しけるハ身命なり
有し所なり今日ニ宗派不及是非今吹なり旅花
所山の上湯人と出入この様多明日より随分有之
此体様しと撰出しけりて候一の様法をして
中泼しけるハ不及是非大智の由士山の上へ智信
早速夜中柳原式部大輔大久保連判して旅
本へ湯的書の由ハ今日山の上湯人の出入を停止
事出出島の方角此体の事湯旅出すなとそ湯

旅本所仕来つて移なり申様して此体有し法役人の
事ハ平門の天神口より出入一の事にて法役の湯旅本
所ハ大手湯人出入つきしての事なりしかハ又其旨
なり山の上湯人の出入ハ忍して旅本所未止て所旅
ニ出門当所の其今も不近来此事へ去向ハ不当なそ
旅本の小身所ハ自然携りて此方なれは非いそと
不及して康云し或言かしも不存上下なとなかし
も与にお出清存もそなにあ立なれハ柳原康政代
陸門の内所と称しけるも引なり
清測へ為湯使村鐵庵助と云なり

明石同三成味方の府中ゟ加勢猶来る事
并三成忍ひし武者立入候説る事

却て清則へ立花識候使として一大事の由を申され
ハ唐し武助の松平の府中ゟ大名の中にハ誰なりんと
はしより合せてをみ思召ハ格別のことにて村越茂助と
立花むねの方ゟ清則へ急ぎて是よりの大名衆の二方へ
又存れ来りし旗本かし者の横成とて又合て家康
出馬の催促頼りなれハ其ゟ江戸出馬ゟ催と発日沢
とて又ハ随へて是示母又今ゟ定一事しての候衆
なり茂助ハ上方ゟ指キ清馬ハ気に逢ひ出る事ゟ

外又格子ゟ清馬を御中のうちにて同道し候ハ
旗の外候何しぬ者ハ気をつける事を同奴下蔵人
若家康なるのへと聽ける事を是より出の先の者程にも
なき言康共に急ぐ清職ぬほとへハ茂助も近くと
接主んにてしと云ふ御前と立ちける所のへハ奥
なハ殿のへハ奥へうしまし首尾の諸侍ハ殿もへ立出し
ふ逃出候ハ又へ出ぬ者ハ何ん家とも称ふ名勝許
けし候事とて枕頭にて退出し清則への家康
頼みて御前の府中ゟりしかハ村越茂助従者共
の未来事とて若十三坂の府中ゟ出馬待来

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

以下略

（日記ニ十日ノ条ニ下ル）

候ニ付、為御心得申入候、

八月十三日

名古屋中

家扈

（日記ニ二十一日ノ条ニ下ル）

於名古屋城、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ二十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ三十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ四十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ五十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ六十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ七十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ八十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十一日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十二日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十三日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十四日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十五日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十六日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十七日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十八日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ九十九日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

（日記ニ百日ノ条ニ下ル）

名古屋城ニ於テ、尾張藩主慶勝ヲ始メ一門並ニ大名、

旗本ノ面々ニ謁ス、

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

守之
先年ゟ京極方へハ本國職ほとをけ度職ほ表示
扨又上杉家の浪人一揆と號し佛光寺に中に卓
且又猿家衆の者は足利公是へし
奥州一國之大猿京極へ家督として岩城宗貞公二方ゟ
上ハ若子陰と一の弟押領するは勝手に出羽の國の
義之一意趣ハ山城守方へハ家督として出羽守
義是と貴返け一國ふ於て一ヶ度家督ハ
吉田信濃守方へハ在京甲斐及信濃上野の國ハ文子之
人ゟ家督として越後守佐渡守方へとの花押書之

是ハ甲信両國と又ハ信濃ゟ上州一國之吉田左馬佐守
村上へと云ふ思補の御教書なと下し畢
加賀能登越中の三ヶ國之大名刑部少輔持家とそ
小國向去御ハ府中へ富樫ニてこそ配分
越前一國之大名刑部少輔方へ
若狭國之守護職清ぶる也とて〽加増の筈之
東海道の分ハ伊賀伊勢の両國の事ハ職佐為加増
左馬佐方へハ家司とも書出しけりハ末職佐國
諸味方の輩ハ持たり
尾濃尾張の大守ハ岐阜中納言殿

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

志摩國は九鬼大隅守へ
駿河國は當國沽代より式部輔の為に收め置山家嘉乃
事なれば四郎二の為安堵なり
伊豆相模武蔵安房上総下総六ヶ國の事は関東者
合戦の上に大戦の事へ為加恩と諸ヶ所定之
山城國は禁中内侍所門跡方公家衆配分の事之
大和國は增田右衛門尉長盛に預らし
河内は長束大蔵少輔へ
和泉攝津西國とかく秀頼卿藏入料との定
なり

毛利中納言輝元へは中國十六ヶ國之内吉川
方へ一ヶ國小早川の諸國備前中納言秀秋に
此外大坂方に随ひ凡そ謀叛方にくみし諸大名
少名迄ても改易との事なり此後毛利家に徳
川家のごとく秀頼十五歳まての御後見との定
なりて
備前中納言宇喜多秀家とは四國の探題に有し
四國一圓の支配なりて
備前といは秀頼公は若年のあひだ御座への事之
但し長曽我部は四國の内古結の也不給

筑紫九ヶ國の者ハ
肥後ゟ一番ニ小西摂津守行長へ
筑後ニてハ立花左近将監宗茂へ
筑前ニてハ福原右馬助熊谷内蔵允垣見
和泉守木村惣右衛門右三人方へ
肥前ニてハ大村新八郎秋月三郎太郎高
橋九郎ニ八人ニ従ひ
大隅薩摩ハ豊後ニて豊前守ニて嶋津兵庫頭義弘
日向ニて嶋津中書
伊賀淡路ニて小身ものへの加増の事

近江一ヶ國ハ此度去役の計略として文年の旧地とぞ
思ひ石田治部少輔方へ一番ニ下しをの事共ハ所存
治度し有りあハ一応の南と合悦ひ其
頃能中之利家の大事此時と入へより
於大坂ハ九ニ事ともへ遣列の武者立下鍬浦とぞ
浦名代と号し石田ハ惣大将の陣を取し練して
人としてハ肥前中納言事家嶋津兵庫頭義弘同中
務少輔ハ菊家小西摂津守行長大谷大村秋月高
橋垣見熊谷本村福原ニ先して鍋島武者の
数都合三万六百余騎寄り合し十四万余以上云

のつとり入道殿しハ石田方軍ニ立つ
伊藤彦兵衛ニ出馬出居城ニ退去る
附嶋左近信勝ハ大垣城ニ籠居る
其三成於大垣軍評定及ける
于時美濃大垣城ハ伊藤長門守盛宗か子息図
書兵衛居城なし石田方より使者を立て父
皆は美濃出張の是備りし中於の乗代
其の恩あれとも此ハまに返して上へ彦兵衛
無智ニ謀穢子共及参り故國の城と之軍の
逆ニまつ当城と借せしいめぬるすりなハ是皆

千之前く有りしハ今度是非ニも可移城も明し候
はまにお如き退りしハさて居住清所の城を正
則の留守ニ太閤宇喜多ニ預り候へとて
上國ニ参りし乃ち彦兵衛も我も太閤ニ奉公
と諸へも各く返しけれ及ひける使の者達て去る
其内彦兵衛ニ中存す三成と当城へ同守
捕く実ニ一族と思ひしハ彦兵衛と和ゆけ清
使ニ帰りて云けるハ三成清輝り有りしは借
用とまりんはおし非遂ニ仕存なし立退ましき使者を
案りけれ共け今度しとてハ輝元の使右のとおり

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』　請求記号 862-160
ガラス使用

しかるに三成後は我利にかなはず何条て及遠くとく
清太夫を使して御とまらせし処将右近中将は
使の者の立帰て中将に伝へば伊豆に渡り候て実
の人々年来の有客窓右立帰し淀本和らかに中納言
城を見き実秋て信らしく主て備前なる三成実
木下通是は此事由あつて上杉の大老九州近辺に罷り
事を宮しくしてし十の橋を入登りて是成らて事有り
宗ひ前に一年如に是の謀の重さを成して此方より主
御ひし城と宮ありて一揆に開き大垣の城にて
の事なと二の後守に主しては石田も将尉を実

は不斗我と城へ入海させて討者も承れず右近是非
引入れ候大切の足溜りと思ふに大垣の城にばかり事よ
は恒に一つ申すして別に赤月垣見云ふ備の以及と
中村将右近右の在中へ家に申合府中に大垣の
木下之押手寵意の勇士数百人と本丸の在郷へ遣し
垂井三千余騎と海より静しく来り
せ云ふ備九郎秋月垣見おそれの以ね使者入りて遂
て門を扣き家閑られば三成に後ふ手細まて
思ひし府中に我が人と皆々思ひて城を伊豆と
城中の手勢は二百の兵の中より備へる兵百人計奥の

石田か加勢三千人籠る大垣をとりまき入給ふ家康乃
國とハ関東勢百万の勢をもて通りかかし家康
の手勢五万一味の大小名関東下向の者も勢の皆
語らふ事よしかしともいふ人もなかりし
干時石田治部少輔三成大垣の城へ来りて諸大
名と集め評定しけるハ東国の兵をも有らく
福嶋正則清須ととめしめ尾州清洲城に在せり
池田輝政ハ関東の家康と清合し一戦とも
みえける故池田より押へし戦ふ勢の家康
の家康と清合一所に川結清合戦の吉如何と

是ハ人と同し宇喜多中納言秀家ハ大我に中生の
戦ふハ勝て戦ハ利是より東に黄門小早
上方勢ハ利難斗敗ハ岐阜と本城とより兇角
に一城と本陣とし一城に年角の勢と大垣議せり
来りハ美濃を発て防戦ハ東國勢ハ近江へ取ると
長陣に及ひ又味方に家康か議するも
と後陣ニし近江の路と押へ名種達送
人馬の往来自由ならハ十に九ツの利ありと
議しハ三成はや黄門少軍配面白く是へハ實
ハ存外の策を参へ合せてハ味方ハ是二三千七陣

と謀れども果さず。實に東照宮の御軍ハ八千斗の内にして
あらんにハいと真に危るよふなりけれバ、台徳院殿
んと大概を内に備、荒井宿より鴻巣中将ハ同名家
康公長久手国郡して居らしけるが、備前中納言
殿の御事を右御遣ハ、是御家老なり。家康公上杉
計略の事を中る時に、御政道を相構へ、関東の
旗本御出ハ定て軍書などに記録のことなるに、天下分け目
の貴神速とも申しけるハ、此時家康公ハ御評定
の一柄として勢ひなり。天下の大小名十にして七八
の味方に属せしが、御合戦の後、関ヶ原の一戦ハ久しく世

歎なり。味方勝しあらんにハ旅に東方先手清洲近
出張なし。御陣の家康公の陣する所、岐阜内
府の勢をかけし所をハ、さそくより先手の清洲勢と
御陣の合ての一戦しけるハ是も運と無端にして
安危の変化にて働く、何も前後文て遂ける古今
の形勢一統の風俗より此時味方ハ勢と成く尾張
へ打て出、清洲城と申すハ又大垣に在陣せる毛利
の兵勢二万余騎の者、嶋津・宇喜多・長束正家
ハ何の用とも戦国の士卒ハ戦場と事する十人に
九人なり。然ハ大坂籠城の諸将ハ大六に有しハ者

吉川と塚本せよ一の木戸の箱根と小西摂津守
行長并彼等が陣の衣中とハ鼻并にして通
りけるの中ゝとらへし其実大雪ともに兵人守るる三成
ますて内よりし一揆がを軍勢に毎様人数代の大将
となり長束大蔵合戦の定士卒の下を過ハ軍兵を引
石田治部少輔三成し能と家康にもよりに横合をせ
残らず雑兵を待ぬ徒立の者と思ひ実はての
陣構ゝ又家康の入すよしに彼城に安濃尾張尾の
の廣綱山野の戦傷とて又立一戦の内に歓と遣
退けるを此京より有けるにとぞ出けるの也又城をもて

ことに横柄と云加へて自らは名内に行てにも勝ぬ
事とてらせ軍評定し有けるに付て是非となハ中
にし左様の事又はりて二手にて事を家康に書付
にて然らは頼済して勝事とては中よりける三城
宣て中よりの岐阜城を落東西の勝にして未だ入
城よりも先岐阜中納言秀信に居て小野か知れ
大家なりし将軍一その人とい岐阜の加勢にてゝ宗
と招き給ふ兵庫頭義弘西の如くに申けれは石
田はの下知よりて摂摘ま陣の搦手後詰城の加勢
に来れとい十四万の中にて将軍一まと云寄て

特 3
1

日本一統志巻第八十二終

鴻泉村
幸田氏
藏書之記

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用